

# 記憶の比較史 震災後/テロ後、加速する「歴史」の時間論

A Comparative Study of Memory:  
Logic of Accelerating "History" Following the Great Hanshin  
Earthquake and the Terrorist Attacks

寺田匡宏

はじめに

- ①阪神大震災の時間論
- ②震災の「記憶」の構造
- ③記憶の比較史

おわりに

## 【論文要旨】

本論文では近年の歴史学で重要な分野になりつつあるメタヒストリーの観点から、出来事が歴史化される際のスピードはどのようなものかを検討した。

取り上げる素材は阪神大震災である。災害という特殊な時間はその後の人間の過去認識、歴史認識に大きな影響を与える。そこで1995年1月17日に起きた阪神大震災を例にとって、現在はどのように歴史として認識されるのかというメカニズムを検証した。

まずははじめに、震災後における時間認識を時期を区分しながら分析した。被災地では地震の衝撃による空白のような時間を経験した後、急速に過去が参照されること、またその地震直後の時期を経過した後は、「記録」の段階と「記憶」の段階に時間認識が分かれることを明らかにした。「記録」の段階においては「震災記録」という言葉がしばしば使われたこと、しかしそれは1998を境にして「記憶」の段階に移行することを述べた。

またつづいて震災後の「記憶」がいかなる構造のもとにあるかを「阪神大震災メモリアルセンター」を例にとって述べた。とくにここではパブリック・メモリー論や博物館表象に関して論じられている記憶と忘却の問題や記憶のエコノミーに留意しながら、震災が「防災」や「教訓」という枠組みで論じられる状況とそれに対立する立場を取り上げた。

最後に震災を、アメリカにおけるテロ事件と対比し、現代における時間感覚の変容とその構造を検討した。大きな物語が終焉した日本とアメリカにおいて記憶という、現在と歴史の中間的な存在がクローズアップされてきていることが現代における歴史の速度の特徴であることを指摘した。

以上本稿では、同時代の歴史意識をメタヒストリーの視角から方法論的に分析した。